



山崎美枝子さん(79)朝日町
新美南吉が安城高等女学校教員時の
教え子。

新美南吉先生について

白哲瘦身のお姿、内面からおのずとにじみでる文学的、芸術的な香りには、一種のさわやかさが感じられました。

先生は鋭い洞察力で生徒一人ひとりの心を深く見つめつつ、厳しい中にも、根底に人間としての温かい愛情を持って個々の能力を伸ばすよう、常に私どもを指導してくださった優れた教師であり、また繊細で鋭敏な感覚をお持ちで、こよなく自然を愛し、野に咲く可憐な花までも美しい目をそそがれた魅力的な先生でもおありになったと思います。

先生はいつも心の中に確固たるご自身の世界を築いておられ、またご自分の才能を信じて、未来に多く読まれ続けられることを確信して、もともと多くの作品を書きたいと強く思われながら、病のためにあのように早くお亡くなりになってしまったことを思いますと、教え子の一人としていまだに惜しみてもあまりあることと思えてならないのです。

思い出―喜び―

私は先生の作品を数多く浄書させていただき、その柔らかくまろやかで、まるで詩を感じさせるような文字を懐かしく心にとどめ、その作品の最初の読者であり得た喜びを、心から感謝しています。多くの思い出とともに、先生からいただいた童話集「おじいさんのランプ」は、私にとりましては大切な一冊の本となりました。

「山崎ちよつと」と先生が手招きで呼ばれ「僕の初めての童話集が出たんだよ、読んでくれたまえ」と、少し照れたような笑顔をなさって、私の目をじっと見つめながら、教室の廊下で童話集「おじいさんのランプ」をくださったのです。

人の心をひきつける独特の魅力ある棟方志功先生の挿絵と装丁。南吉先生の手から童話集を渡していただいた時は、喜びの思いでいっぱいになりました。

先生の右肩の少しあがったその後ろ姿に、今の先生の内なる喜びがあふれていて、生き生きとした明るさを物語っているような感じさえしました。私は先生が中央廊下の方へ曲られるまでじっと見送っていました。先生は、ご自分の心の内をあからさまにおもてに出されるような先生ではないのですが、この時は本当に最初の童話集が発行されたということで、お嬉しかったのではないでしょう。明るい雰囲気はこちらにも伝わってくるように感じました。この様な喜びの時の先生を追憶として脳裏に浮かべる事のできる幸せを今改めて感じております。

思い出―悲しみ―

それは昭和十七年のある冬の日でした。病床に臥しておられた先生が久し振りに学校に出てこられたのです。コートの襟を立て、白い大きなマスクをして。



山崎さんは、南吉が出版社に送る清書原稿づくりをした生徒3人のうちの1人で、先日その原稿が東京で見られた。

転写稿の発見

南吉先生に頼まれて浄書しました「おじいさんのランプ」の転写稿が、この程、詩人巽聖歌先生の所蔵されていた資料の中から、発見されました。新美南吉記念館の学芸員の方がそれを持つてお訪ねくださいました。六十三年ぶりに浄書原稿を再読できましたことを大変嬉しく思っております。先生の思い出がよみがえり、あの頃を思いおこして懐かしい気持ちでいっぱいになりました。

私にとっての南吉先生の存在

南吉先生の教え子である私も齢八十を前にして思いますことは、感受性の豊かな少女時代のその貴重な五年間を、直接先生に教えを受けましたこととでございます。振り返ってみればそれは得難い幸せなことであつたように思います。

今、作品を改めて読みますと、先生のそのお人柄が背後から伝わってくるような気がいたします。年経れば経る程、先生の真価真髓がわかりつつあるように感じています。これからも、より深く作品に立ち入り自分なりの理解の度を広め、深めて行きたいと思っております。

安城時代の略年譜

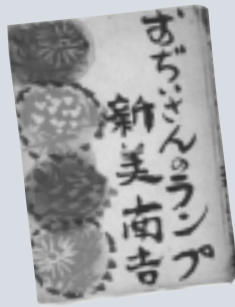
大正2年7月3日	父渡辺多蔵、母りゑの二男として知多郡半田町で出生 本名正八
大正10年7月	母の実家新美家の養子となる
昭和11年3月	東京外国語学校英文科卒業
昭和11年11月	病氣(結核)のため岩滑へ帰郷
昭和13年4月	安城高等女学校に奉職 1年生を担任 月給70円
昭和14年2月	4年生の関東修学旅行の付き添い(画帖「三人道中」)
昭和14年2月	生徒詩集第1集「雪とひばり」発行 以下第6集「星祭り」まで発行
昭和15年3月	安城新田の大見坂四郎方の一室を借りる
昭和15年3月	東京へ行き巽聖歌、与田準一らに会う
昭和16年10月	生徒を引率し大府の傷痍軍人療養所を慰問
昭和16年10月	学習社から「良寛物語 手毬と鉢の子」出版
昭和17年3月	腎臓結核悪化血尿出る
昭和17年3月	4年間担任を務めた同女学校19回生卒業式
昭和17年8月	「都築弥厚」に執筆のため長野県万座温泉に宿泊
昭和17年10月	有光社から童話集「おじいさんのランプ」出版
昭和18年1月	このころから学校欠勤
昭和18年2月	長期欠勤のため同女学校退職
昭和18年3月22日午前8時15分	喉頭結核のため自宅で永眠(満29歳)法名釈文成
昭和23年11月	同女学校中庭に教え子たちによる「ででむし詩碑」除幕

安城時代の代表作

童話	最後の胡弓ひき	昭和14年5月
小説	花を埋める	昭和14年10月
小説	百年物語	昭和15年4月
伝記	良寛物語 手毬と鉢の子	昭和16年3月



童話	うた時計	昭和17年11月
童話	ごんごろ鐘	昭和17年3月
童話	おじいさんのランプ	昭和17年4月



童話	牛をつないだ樫の木	昭和17年5月
童話	花のき村と盗人たち	昭和17年5月



童話	和太郎さんと牛	平成15年5月
童話	百姓の足・坊さんの足	平成15年5月

新美南吉に親しむ会

昭和50年の市立図書館主催「新美南吉に親しむ講座」及び翌年の「文学講座」の受講生が中心となり、昭和52年に結成されました。毎月第1土曜日に例会を開き、作品を読んだり、その背景を探ったりしています。現在、会員は17人で、当初から参加している澤田喜久子さんが会長を務めます。

今回、歴史博物館企画展「安城と新美南吉」で来館者に配布する「安城 新美南吉を歩く」制作のため編集作業中のところをおじゃしました。



「年を経るごとに変わる読後感」

この会を通じて、何度も作品を読んでいます。自分の物を見る物差しが変わるから、読むたびに違う見方ができます。読み返すと、また新たな発見があるんです。

「子どもの反応が得られやすい親しみやすさ」

国語の教員として子どもたちに南吉の作品を読ませてきましたが、これほど子どもたちの反応を得られるものはなかった。国語が苦手な子ども、必ず一言、二言感想を話してくれる。その親しみやすさが南吉作品の魅力なんだろう。

「身近に感じることが出来る」

新美南吉の教え子の方もこの会に参加していただいています。南吉にじかに接していた方からお話をうかがうと、本当に身近な存在になります。こんな経験はなかなかできるものではないので、毎回、勉強だと思って読ませていただいています。

「南吉の追っかけ？」

子どもから「お母さんは、南吉の追っかけだね」と言われ、恥ずかしくなることも。でもそれくらい、不思議な魅力があるんですよ。

「人柄がにじむ南吉の日記」

作品もおもしろいが、日記は南吉の人柄が出ていてもっとおもしろい。決してきれいな日記ではないんです。時に傷ましく、時に身につまされる。「南吉もこんなことを考えていたのか」と思うと親しみがわく。

日記や作品には、日常生活の様子がたくさん出てきます。安城の様子がうかがえる部分もあり、これはそのまま郷土の資料にもなります。

「南吉からまちづくりを」

南吉ゆかりの地は、出身地である半田市と安城高等女学校教員として勤務していたこの安城市だと思っています。でも、そのことを知らない人もたくさんいます。遠くに行かなくても文学の散歩ができるのに。安城市

にとつて貴重な財産なので、そこからまちづくりを進めたらすてきなといつも思っています。もっともつとみなさんに伝えていきたいですね。

「作品も温かく、読者も温かい」

友人に誘われて、この会に参加することになりました。まだ日が浅く、読んだ作品の数も少ないんですけど、皆さんの作品に対する感想を聞くだけで、心地よい気分になります。少しずつわたしも「人間らしい新美南吉」の魅力をたくさんの人に伝えていきたい。

今回、編集を行っていた「安城 新美南吉を歩く」は、手にした人々が市内の南吉ゆかりの地を巡る際のガイドとして利用していただくよう制作されたもの。ていねいで細かい検証作業が行われていました。

「二つの言葉に対するこだわり」

このマップをはじめ、今までも南吉に関する著作を会として作ってきました。10人いれば10の視点があり、その世界は無限に広がっています。それぞれが一字一句にこだわりたいと思っている中で、それをまとめるというのはたいへんな苦勞です。時には意見の衝突も。でも、それを乗り越え、出来上がったものは、自分たちで作ったと自信を持っていえる、かけがえない私たちの作品です。ぜひ、皆さんにも見ていただきたいですね。

下宿先を訪ねて―新田町―

―夫・博昭さん 実ほ、そんなに新美南吉に思い入れはないんですよ。生まれたときから住んでいる自分の家ですから。もちろん、子どもながらに、ここに南吉が下宿していたことは知っていましたけど。今では嫁いできた妻のほう詳しくなりました。

―妻・まゆみさん 学生のころ保育士の勉強をしていたため、児童文学、とりわけやさしさと絵画的描写に満ちあふれている新美南吉の作品は大好きでした。

ところが、結婚する少し前のこと(博昭さんから)「うちがテレビに出る」と聞き、実家の岐阜で何げなく番組を見ていてびっくり。その時初めて、嫁ぐ夫の家が新美南吉の下宿と知り、鳥肌が立つほど驚きました。

その後、夫の父や祖母などから下宿していたころの様子をいろいろ聞きました。いつも雨戸を閉めきつて、一人でいることが多く、寝転びながら、本を読んだり、日記を書いたり、そしてもちろん数々の作品の執筆もしていたようです。

当時、この周辺は旧国鉄の電車が見えるほど家も少

なく、自然に満ち溢れていました。桜町にある勤務先の安城高等女学校への道中に見た自然の光景が、作品にも反映されているのかなと感じます。

また、初めての単行本「良寛物語 手毬と鉢の子」を出版したとき、父にとてもうれしそうに手渡したそうです。その本は偶然にも現在まで残っており、今回の企画展で出品予定です。

―博昭さん 南吉を愛する皆さんにとって、こは、現存する数少ない建物です。から、この建物を守り、伝えていかなければならないということには少なからず思っています。わたしたち家族のもとへ南吉好きの妻がやってきたというのは、南吉先生が心配して呼び寄せたのかなと思うこともありますよ(笑)。



大見博昭さん・まゆみさん夫妻
南吉が教員時代に寝泊まりしていた下宿(新田町)に在住。数々の作品が執筆されたこの場所を今もなお多くの人が訪れる。



現在の様子

歴史博物館企画展「安城と新美南吉」

【7月16日(土)～9月4日(日)】

今回の企画展では、安城高校が所蔵していた、南吉の教師としての仕事ぶりをうかがうことのできる資料を中心に、安城と南吉のかかわりを紹介します。

- とき 7月16日(土)～9月4日(日)午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 休館日 毎週月曜日、7月19日(火) ※7月18日(月)は開館
- 観覧料 一般300円(高校生以下無料)



昨年11月、安城高等女学校の教員時代に書いた画帖、俳句などの作品や同校の同窓会報、職員名簿など57点が安城高校から寄贈されました。

■企画展記念講演会

「南吉がかかえこんだもの―近代児童文学とは何か―」

- とき 7月16日(土)午後2時
- ところ 歴史博物館講座室
- 講師 横山信幸氏(愛知教育大学教授)

問い合わせ▶文化財課(歴史博物館内／☎77)6655)